

# 語らない自己紹介に傾聴する：Never Let Me Go

渡 邊 晶 子

## 要 旨

本稿ではカズオ・イシグロの6作目の長編小説 *Never Let Me Go* (2005) の冒頭3ページに及ぶキャシーの自己紹介に注目し、<sup>1)</sup> 語られる言葉を情報の受け手の立場から分析することで、不可解さを生む表現を明らかにする。また、彼女が口にする“lucky”という言葉と彼女の回想との関連、更には、延命を願って会いに行った先で語られる「世間 (people)」の身勝手な思いやヘルシヤムでの教育について考察を行い、重い静けさを纏って語られる説明不足なナレーションを生む原因と自己紹介の目的を探る。

キーワード：語り、幸運、記憶、からくり

## 1. はじめに

カズオ・イシグロ (Kazuo Ishiguro) はノーベル文学賞受賞記念講演で、いかに創作へと進んできたかを自らの人生を振り返りつつ詳細に述べている。著作における思いの変化については具体的な瞬間を説明しつつ述べ、作家としての使命と次世代への期待についても熱く語っている。*Never Let Me Go* に関しては、“When writing my novel *Never Let Me Go*, for instance, I set off from the start by thinking about its central relationships triangle, and then the other relationships that fanned out from it” (イシグロ 2018: 78, 80) とのみ述べ、キャシー (Kathy) とトミー (Tommy) と ルース (Ruth) の三角関係から物語を発展させていったことを明かした。これは、“The thought came to me . . . that all good stories, never mind how radical or traditional their mode of telling, had to contain relationships that are important to us; that move us, amuse us, anger us, surprise us” (イシグロ 2018: 76, 78) との気づきをイシグロ自身が得た後に取り組んだ創作の具体例として示されたものだが、*Never Let Me Go* を念頭に “radical mode of telling” との表現を用いたかは定かではない。しかし、ナレーターのカシーの語りが伝統的なものとはかけ離れているのは明白で、イシグロは登場人物の関係性を重視しつつも、自らが仕掛けた「からくり」によって、読者が彼らの感情に寄り添うことを敢えて困難にしているといえるだろう。実際、「からくり」は物語が始まる前に既に仕掛けられている。第一部の前ページには“England,

late 1990s” とのみ書かれていて、読者はこれが作品の舞台となっているのかと頭の片隅に置いて読み始める。しかし、John Mullan が “this novel . . . is removed from any historical reality that we can recognize” (104) と指摘するように、この作品は 1990 年代後半やその前後のイングランドを描き出してはいない。イングロが *The Remains of the Day* に関して “My version of England would be a kind of mythical one, whose outlines, I believed, were already present in the imaginations of many people around the world, including those who had never visited the country” (イングロ 2018: 50) と述べたことは、この作品にも当てはまるといえるだろう。史実や現実を映し出したものとも SF とも異なる想像上の世界が、「ありうる」と感じられる現実味と「ありえない」と感じさせる不気味さが溶け合うように、描かれているのである。ありふれたフレーズの題名を持つこの小説がそのような作品であることに、読者は容易には気づかせてもらえない。

“Never Let Me Go” はキャシーが子供の時に手に入れた宝物のカセットテープに入っていた曲の題名である。この曲に合わせて歌いながら踊っているのをマダム (Madame) に見られ、その数か月後、カセットはなぜか行方不明になる。懸命に探しても見つかることはなかったが、キャシーの落胆を覚えていたトミーが成人後に同じカセットを探し、彼女にプレゼントする。マダムと再会した際、キャシーは子供の時から気になっていたマダムの気持ちを確認するために “*Never let me go. Oh, baby, baby. Never let me go . . .*” (266) と歌って聞かせる。マダムはその歌詞を情景と共に詳細に覚えていて、“And I saw a little girl, her eyes tightly closed, holding to her breast the old kind world, one that she knew in her heart could not remain, and she was holding it and pleading, never to let her go. That is what I saw” (267) と語る。「消えゆく世界」をしっかりと胸に抱き、離したくないとの思いで歌う幼い少女が、遠からず消えていく定めにあるという皮肉が改めて浮き彫りにされる。同じ時間に同じ場所で同じ空気を吸うことがあっても、全く異なる世界を生きるキャシーとマダムの間を、時を超えて漂い、折に触れて大きな音を鳴らしはするものの作品全体に通奏低音のように響くフレーズといえるであろう。消えゆく時の入り口に立ったキャシーは、誰に “Never let me go” と語りかけていると解釈できるだろうか。

## 2. キャシーのナレーション

イングロの小説は主人公が物語る形式で知られている。しかし、「情感を生む文体は、作者の押し付けがない分読者に主観的に読むことを求める。作者からのメッセージは受動的に読んでいると過ぎ去ってしまう。プロットの娯楽的な起伏や作者の熱い語りかけも無い」<sup>2)</sup> (508) と山内啓子が述べるように、驚くべき内容が綴られていてもそこに意識を集中させるような表現は彼の小説にはなく、どこか他人事のような冷静さを纏った語りが続く。この点を意識しても、*Never*

*Let Me Go*のキャシーの語り口調は特徴的である。終始淡々と語られる彼女の言葉には、激しい感情や思いは表出されていない。子どもらしい無邪気さも、若者らしい大胆さや無軌道さも、彼女が語る人々からは伝わってこない。作品全体を不思議な静けさが覆っている印象を受ける。共感をしたい読者を拒絶するような重い静けさとも言えるだろう。不思議な違和感を与えるそのトーンについてWai-chew Simは、冒頭の数行について“her words are remarkable because they exemplify how it consistently tones down, dampens or makes banal its potentially lurid material” (80) と述べ、後に明らかになる身の毛もよだつような真相がもたらす勢いさえ削ぐものであることを強調している。

またMullanは、彼女の語りの特徴について述べる中で“*Like The Remains of the Day* (1989), *Never Let Me Go* is narrated as if it were being spoken rather than written” (106-7) と指摘している。実際、“As I say” (4), “I want to talk about” (136), “All I can say” (193), “What I’m saying is” (274), “But as I say” (281) といった表現は、キャシーが語り掛けるようにナレーションをしていることを裏付ける。形式に配慮して厳選された表現とは異なり、近くで語られているかのような表現であるにも拘わらず、感情の入りは勿論、その起伏さえもほとんど伝わってこないことが、読者の違和感を増幅させる大きな要因となっているといえるだろう。

更に、キャシーのナレーションに顕著な特徴として、回想と現在を行き来する彼女の存在が挙げられる。物語は概して言えば、現在のキャシーの紹介で始まり、彼女が幼い頃から成長していく過程が回想され、終盤には最近のことが語られている。しかし、章の導入や次章への繋ぎに現在の彼女の思いが頻繁に語られるだけでなく、記憶が曖昧な時や考えを改めたい時などに、“Thinking back now, . . .” (36), “Anyway, the point is, . . .” (65), “I think that was all she said” (80), “When I think of that moment now, . . .” (168) と、現在のキャシーが回想の中に突然飛び込んでくるのである。イシグロの“If I could go from one passage to the next according to the narrator’s thought associations and drifting memories, I could compose in something like the way an abstract painter might choose to place shapes and colours around a canvas.”(イシグロ 2018: 46)との言葉は、キャシーの語りの特徴に表れているといえるだろう。しかし、それだけではない「からくり」をイシグロは仕掛けているとえないだろうか。キャシーはナレーションをしつつも、物語を読者に預けていない。常に自分の語る過去の一瞬、一瞬に寄り添って、全てをもう一度確認しているかのような姿勢を見せている。彼女の不可思議な立ち位置と独特なナレーションを生む原因について、以下の分析を通して探ってみたい。

### 3. 不可解な自己紹介

My name is Kathy H. I’m thirty-one years old, and I’ve been a carer now for over

eleven years. That sounds long enough, I know, but actually they want me to go on for another eight months, until the end of this year. That'll make it almost exactly twelve years. (3)

*Never Let Me Go* の書き出しの4文である。文頭に字下げはなく、<sup>3)</sup>唐突に、極めて短い文章で、この小説が主人公による語りという物語形式であることが示される。名前、年齢、職業と、速いテンポで主人公の自己紹介が進んでいくかのような印象を与えるが、実は「語られているが、語られていない」といえる。語られている内容を読者が理解するのに十分な情報が伝えられることなく、話が進んでいくのである。これは、この作品の中で唯一、生徒たちに隠された真実を伝える道を選んだルーシー先生 (Miss Lucy) がヘールシャム (Hailsham)<sup>4)</sup>での教育について語る言葉 “The problem, as I see it, is that you’ve been told and not told.” (79) と関連していると考えられる。この言葉が意味することがどのようなものなのかを、イシグロは冒頭部分で実践して見せているとはいえないだろうか。そうであるならば、さりげなく織り込まれた情報にも目を向けて吟味をし、語られていない事柄さえも繋いでいかなければ理解できない世界が描かれていることが示唆されているといえる。そしてその世界への鍵となるのが、キャシーの自己紹介であると考えられるのである。

キャシーと名乗る女性は、自分の苗字をアルファベットの “H” としか述べていない。本当の苗字は何で、どのような理由があって告げることを避けているのかは分からない。次に、11年間 “carer” をしていると言うが、この言葉の意味は “A person whose occupation is the care of the sick, aged, disabled, etc.; one who looks after a disabled or elderly relative at home, esp. one who is therefore unable to work” (OED) と幅広く、“carer” だけでは具体的なイメージは湧かない。11年間で “long enough” とされるはどのような対象をどのようにケアする仕事なのだろうか。また、キャシーが唐突に口にする “they” とは誰で、年末までの8か月だけは彼女が仕事を継続することを願っているが、それ以上は望んでいないということなのか。年明けには何があるのか。仕事を続けられない理由は彼女の側にあるのか。12年という期間に特別な意味があるのか。

説明に戻ることはなく、キャシーは語り続ける。

Now I know my being a carer so long isn’t necessarily because they think I’m fantastic at what I do. There are some really good carers who’ve been told to stop after just two or three years. And I can think of one carer at least who went on for all of fourteen years despite being a completely waste of space. So I’m not trying to boast. But then I do know for a fact they’ve been pleased with my work, and by and large, I have too. (3)

ここで、彼女の仕事ぶりを評価できる立場にある人々が“they”であることは判明するが、具体的にどのような人々なのかの説明はない。彼女の仕事に関する疑問は更に増す。自他共に認める素晴らしい“carer”であるキャシーが高く評価する人々が、僅か2、3年で辞めるように言われることがあるとは、一体どのような職場なのか。

一方で、キャシーの性格が窺い知れる表現が散見される。“I’m not trying to boast”との言葉は謙虚さや自制心の表れともいえるだろうが、自分自身に向けて“fantastic”との言葉を用い、他者を褒めるのには“really good”を使っていることから、自らを上位に置く意識が働いていることが読み取れる。また、他者に対して“completely waste of space”と言い切る彼女には、ケアをすることにおいて非常に優れた人間らしからぬ冷徹さが窺える。しかし、“they”だけでなくキャシー自身も仕事に満足していると述べていることは、不満や批判的な傾向が強いわけではないことを印象づける。

仕事に対する評価への関心の高さを示しながら、キャシーの話は続く。

My donors have always tended to do much better than expected. Their recovery times have been impressive, and hardly any of them have been classified as ‘agitated’, even before fourth donation. Okay, maybe I *am* boasting now. But it means a lot to me, being able to do my work well, especially that bit about my donors staying ‘calm’, I’ve developed a kind of instinct around donors. I know when to hang around and comfort them, when to leave them to themselves; when to listen to everything they have to say, and when just to shrug and tell them to snap out of it. (3)

文頭から非常に気になる言葉が出てくる。“My donors”の“donor”である。この名詞には大きく分けて“is a person or organization who gives something, especially money, to a charity, organization, or country that needs it”と“is someone who gives a part of their body or some of their blood to be used by doctors to help a person who is ill” (COBUILD)との二つの意味がある。2文目にある“recovery times”が、後者の意味であること、更にそれが献血のように回復期間を必要としないものではないことを示唆する中、“fourth donation”との表現に驚かされる。一人の人間が4回も臓器提供を行うことなど可能なのだろうか。仮に大金が支払われるとしても、誰が望むだろうか。

キャシーは躊躇うことも言い淀むこともなく、この“donor”という謎めいた言葉を使い、誇らしげに“carer”としての自らの腕前を語る。臓器目的の誘拐などの犯罪に関与しているような後ろめたさは微塵も感じられない。これまでになく詳細に“donor”の扱いは会得しているとの自負が語られる。手術を繰り返し、生死の境を行き来する人の心を完全に読み取ることなどで

きるものだろうか。彼女がケアをしている“donor”は人ではないのかとの疑問さえ生じるが、“when to listen to everything they have to say”との表現は、その疑問を否定する。

“Anyway, I’m not making any big claims for myself”で始まる第二段落では、キャシーはまず、現在“carer”として働いていて、自分と同等に優れているのに半分も評価されていない人たちの存在に言及する。そして、キャシーの住まいや車、ケアをする人を選ぶことのできる特権に対する彼らの怒りに理解を示し、更に続ける。

And I’m a Hailsham student – which is enough by itself sometimes to get people’s backs up. Kathy H., they say, she gets to pick and choose, and she always chooses her own kind: people from Hailsham, or one of the other privileged estates. (3-4)

ここでキャシーが“I’m a Hailsham student”と現在形で語っていることは注目に値する。文字通りに理解すれば、彼女は“carer”であると同時に生徒ということになる。ヘールシャムは、その生徒であるというだけで時に人々を怯ませるような学校であること、同様に“privileged”とみなされている学校が存在することも知らされる。しかし、それらの学校の何がどう特別なかは語られない。明らかになったのは、彼女が選り好みする“donor”は、ヘールシャムや同じように特別な学校出身の“people”だということである。そして、“donor”を選り好みできるのは自分に限られたことではなく、6年ほど前から選ばせてもらえるようになったただだと語るのだが、ケアをする患者を選ぶことがなぜそれほど重要なのかは謎のままである。

続く段落は“*And why shouldn’t they?*”との修辭疑問文で始まる。興味深いのは、それに続く“*Carers aren’t machines. You try and do your best for every donor, but in the end, it wears you down. You don’t have unlimited patience and energy*” (4)との言葉である。まず、“carer”という非常に人間的な仕事を“machine”と比較すること自体に違和感を覚える。また、苦勞を伴う仕事であることは想像に難くないので、わざわざ忍耐とエネルギーには限りがあると強調する必要があるのであるだろうか。更に、プロとして高い技能を誇る彼女が、“donor”に“*your own kind*”を選ぶのは当然のことで、彼らの進む一步一步に共感できなければ仕事を続けられなかったとなぜ考えるのだろうか。選び続けたからこそ、長い年月を経てルースとトミーと再び親しくなる機会を得たと告げるキャシーだが、その文章からは不自然な印象を受ける。第2段落の初めからの34行の中に“*choose/choosing*”が10回も使用されているのである。一般的に英語では同じ言葉の繰り返しを避けるため、何らかの意図、もしくは非常に強い思いがあるとしか考えられない頻度である。しかし、説明となる言葉はない。

不可思議な言葉は続く。“*But these days, of course, there are fewer and fewer donors left who I remember*” (4)とは、どういうことか。31歳のキャシーが覚えている“donor”が最近で

はどんどん減ってきているとは何を意味していて、それがなぜ「当然の成り行き」とされるのか。彼女が今年いっぱい“carer”をやめることについて「潮時」だと感じていることと関係があるのだろうと予想はできる。だが、寄宿学校にいる生徒全員が“donor”になるなどということに思い至るほどの情報は与えられていない。

次いで語られるのは、ルースとの再会と二人の関係である。

. . . and the instant I saw her again, at that recovery centre in Dover, all our differences – while they didn’t exactly vanish – seemed not nearly as important as all the other things: like the fact that we’d grown up together at Hailsham, the fact that we knew and remembered things no one else did. (4)

ここから読み取れるのは、一目でわかる程ルースの状態が極めて悪かったこと、思い出を共有できる存在として彼女を強く認識したことである。また、“all our differences”がキャシーを苦しめ続けていたであろうこと、弱り切った旧友を前にしても消し去れないほどの不和であったことが窺える。それにも拘わらず、ヘールシャムでの記憶を共有できるということがキャシーにとってなぜそれほど重要なのかは、彼女自身にもわからないことなのかもしれない。

この後、キャシーは約1ページに渡って、一人の“donor”とのエピソードを語る。3回目の提供を終えて、呼吸さえ困難な状態に陥っていたその男性は、自分が過ごした場所のことは語ろうとはせずに、ヘールシャムについて聞きたがる。キャシーが口にする「生徒たちのベッドの下の宝箱」、「体育館 (pavilion)」、「美術室」「食事」などの言葉から、ヘールシャムが寄宿学校であることわかる。男性が何度も同じことを訊くのは薬のせいかと思っていたキャシーだが、そうではないことに気づく。

What he wanted was not just to hear about Hailsham, but to *remember* Hailsham, just like it had been his own childhood. He knew he was close to completing and so that’s what he was doing: getting me to describe things to him, so they’d really sink in, so that maybe during those sleepless nights, with the drugs and the pain and the exhaustion, the line would blur between what were my memories and what were his. That was when I first understood, really understood, just how lucky we’d been – Tommy, Ruth, me, all the rest of us. (5-6)

キャシーの“carer”としての腕前が、彼女の洞察力の鋭さと共に読み取れる言葉である。これまで語られた彼女の自負も他者からの評価も、過大なものではないことを示している。死期が近

いこの男性が、自分よりも遥かに恵まれていたキャシーの記憶を繰り返し脳裏に描き、染み込ませることによって、それを自らの記憶に置き換えようとしていることに気づくのである。男性自身がそれを意識していたかは不明で、ただ気持ちが高くなる方向へと話を進めていたのかもしれない。キャシーは不快感も同情も言葉にせず、この男性の願いを自らの願いとしているかのように、ただ受け止める。しかし、この体験はキャシーの生き方を変える。ヘルシャムのことは忘れようとしていた彼女が、意識的にヘルシャム出身の“donor”を選ぶようになったと言う。

自己紹介の最後をキャシーは、自分たちがいかに“lucky”だったかを初めて“understood, really understood” (6) と言って締めくくる。なぜヘルシャムは他と比較され、どう異なるのか、なぜteacherではなく“guardian”なのか、また、“he was close to completing” (5) とあるが、どのような使命と果たそうとしているのか、ここでは全く説明されない。多くが語られないままキャシーは自己紹介を終え、ヘルシャムを思い起こさせる体育館探しの話に進むと、そのまま子どもの頃の思い出を語り出す。

始まるのは、人から羨ましがられ、時には妬まれるほど恵まれた寄宿学校出身で、仕事に満足し、高い評価も受けている若い女性の物語である。しかし、次第に明らかになるのは、彼女には明るい未来などないということである。友人のルースや恋人のトミー、ヘルシャムやコテージ (Cottage) で共に過ごした仲間や、多くの“donor”たちと同様に、静かに消えていくことが定められているのである。8か月後には自分も“donor”となるキャシーの自己紹介は、実際、何を語っているのだろうか。

#### 4. “Lucky”

他人に移植する臓器のために生を受け、集団生活の中で成長を監視され、成人後に何度も臓器提供をさせられ、30歳になる頃には死を迎えるという人生に“lucky”という言葉は似つかわしくない。キャシーが自己紹介の最後に口にした“lucky”は、他の場所で育った“donor”たちとの比較において発せられた言葉である。しかし、彼女が思い出を紐解き始める直前に用いたこの言葉には、大きな意味があるはずである。なぜなら、実際、キャシーの語る子ども時代の物語は、苛めや嘘や長く続くルースとの不和に加え、自分たちを蜘蛛でも見るような目で見るとの存在や「あなた方は臓器提供のために作られた存在」とのルーシー先生の言葉など、不穏なもので満ちているのである。それでも、“lucky”だったと述べるキャシーの言葉には、読み取るべき何か特別な意味が込められていると考えるべきであろう。

キャシーのナレーションに際立った特徴があることは既に述べたが、“This was all a long time ago so I might have some of it wrong” (13), “I can’t remember exactly what I said to her that night” (138), “I’m still not sure why this happened” (182) などの言葉を繰り返す彼



女の語りからは、不誠実な言葉や情報操作で読者をコントロールしようといった意図は感じられない。<sup>5)</sup> それとは異質の、冷たい距離を置かれている印象と「おわかりでしょうが」と言われているような圧迫感を受けるのである。そう感じさせる要因の一つに“you”の使い方がある。“If you’re one of them, I can understand how you might get resentful – about my bedsit, my car, above all, the way I get to pick and choose who I look after” (3) の中の“you”は、不特定の人々を示しているとも解釈できる。しかし、“I’ve heard it said enough, so I’m sure you’ve heard it plenty more, and maybe there’s something in it” (4) の“you”は明らかに特定の、キャシーについての噂が実際に耳に入る作品中の人々を指している。更に、“By the time I finish, remember, I’ll have done twelve years of this, and it’s only for the last six they’ve let me choose” (4) の“remember”は、読者に直接投げかけられた言葉で、彼女の死後にも生きていであろう、しかも彼女の仕事や生い立ちを詳しく知り得る人々に向けられている。キャシーは誰に語りかけているのだろうか。

Mullanはキャシーの用いる“you”に関して、“I don’t know if you had ‘collections’ where you were” (38) との表現に注目し、“The ‘you’ to whom she imagines herself speaking is someone like herself, a ‘carer,’ a former ‘student,’ another clone” (107) と述べている。更に、キャシーたちは「普通の人間」と接触する機会が限られていて、狭い知識しか持たないことに言及したうえで、“She cannot imagine a different kind of being” (108) と論じている。Mullanは議論を他に移すが、彼のこの解釈はキャシーの語りの不自然さのみならず、運命をただ受け入れて行動するキャシーたちに対する疑問についても多くを説明しうるものといえないだろうか。つまり、特殊な意味で使われている“carer”“guardian”“completion”“possible”といった言葉に説明がないことも、一般的な意味を知らないキャシーが同様の境遇にあるクローンに語りかけているとするならば、無理からぬことといえるだろう。苗字がアルファベットだけで表わされていることも、そして「運命から逃げ出す」ことが全く彼らの脳裏をよぎることがないのも然程不思議ではなくなる。彼らには頼れる親兄弟も親戚も無く、臓器提供者として短い命を全うするという「刷りこみ」<sup>5)</sup> がなされた集団の中で、ヘルシャムの敷地の外へ出た生徒たちが極度の恐怖と孤独を味わった末に悲惨な死を遂げた話を何度となく耳にして育ったのである。<sup>6)</sup>

しかし、過酷な運命を終えようとしているキャシーは、果たして思い出語りだけを目的としているのだろうか。同様の運命を生き、死んでいく仲間のみを読者として想定していたならば、キャシーはいかに恵まれた少女時代を過ごし、立派な“carer”として生き、冷静に“completion”に向かっているかを誇らしげに語れば良いわけで、セックスへの衝動を抑えられない自分に強い不安を抱いたことやポルノ雑誌の中に“possible”を探したことなどを詳細に述べる必要はないだろう。「生殖」ができない状態で生み出された彼女たちも「性」を背負って生きていることを、愛も嫉みも憎しみもプライドも持って生きていることを知らせたい相手がいるはずなのである。

## 5. 教えられた真実

絶望的な時を生きるキャシーとトミーに“**You were lucky pawns**” (261) と言い放った人物がいる。ヘールシャムの主任保護管であったエミリ先生である。未来への希望が打ち砕かれ、「全ては医学のためだったと言うのですか」と問いかけるトミーに、「あなた方はまだ“**lucky**”な方だった」と言うのである。この言葉がキャシーに与えた影響について、この発言に至る過程も含めて考察を進めていきたい。

ルースが「使命」を終えた後、キャシーは次が4回目の提供となるトミーと共にマダムと呼ばれていた女性を訪ねる。年に何度かヘールシャムに来て、生徒たちの絵や粘土細工の中から優れた作品を選んで持ち去っていた人物である。「真に愛し合うカップルには臓器提供の延期措置がある」との噂を確認するためだったが、そこにはマダムだけでなく、エミリ先生がいた。キャシーとトミーは噂の真偽について、また、ずっと抱えていた数々の疑問について、恐る恐る質問を始める。エミリ先生は大人になった二人にヘールシャムの存在理由と目的、閉鎖に追い込まれた原因などを躊躇いなく話す。だが、同時に悍ましい真実をも曝け出すのである。

それは、「なぜ生徒たちの作品を外へ持って行ったのか」との質問にエミリ先生が答えることから始まる。

‘We took away your art because we thought it would reveal your souls. Or to put it more finely, we did it to *prove you had souls at all.*’

She paused, and Tommy and I exchanged glances for the first time in ages. Then I asked:

‘Why did you have to prove a thing like that, Miss Emily? Did someone think we didn’t have souls?’

A thin smile appeared on her face. ‘It’s touching, Kathy, to see you so taken aback. It demonstrates, in a way, that we did our job well.’ (255)

“Or to put it more finely” との言葉に続く “to prove you had souls” とのエミリ先生の言葉に、キャシーとトミーは互いに顔を見合わせる。二人の驚きが咄嗟にそうさせたことを “for the first time in ages” との表現が説明する。“Did someone think we didn’t have souls?” と問いかけるキャシーに、エミリ先生は微かな笑みを浮かべる。成長したキャシーたちから「人として」自然な反応が返ってきたことから、自分たちの試みが成功したことを確認して、微笑みなのである。そして、二人の魂が受けたはずの衝撃に寄り添う様子も見せずに、当時はそれは自明なことではなかったとの説明をしつつ、現在も嘆かわしい環境で育てられている “students” に話を移す。

その後のエミリ先生の話は、二人の心に更なる衝撃を与える。

‘Most importantly, we demonstrated to the world that if students were reared in humane, cultivated environments, it was possible for them to grow to be as sensitive and intelligent as any ordinary human being. Before that, all clones – or *students*, as we preferred to call you – existed only to supply medical science.’ (256)

人道的で文化的環境の中では“students”も、“ordinary human being”のように感受性や知性を持つ子どもとして育つことを世界に証明したと誇らしげに語るエミリ先生は、同時に世の中の、そして自身の持つ非情な価値観を二人に突きつける。キャシーたちは言わば実験台で、“ordinary human being”とは全く別の存在と見做され、同様の感受性や知性を持ちうるのかさえ疑問視されていたのである。更に、“Before that”と言葉を続けたエミリ先生は、躊躇いなく「クローン」という言葉を口にする。子どもたちを“students”と呼んではいた“guardian”たちは、自分たちを見上げる小さな存在を人ではなく「クローン」と見ていたことが明らかになる。そして重要なのは、“you”と口にしたエミリ先生は、ヘールシャム以前の“students”だけではなく目の前に座るキャシーとトミーを含めて、医学のためだけの存在だったと告げているのである。懐かしさや帰属意識から現在も自分はヘールシャムの“student”であると考えるキャシーには、<sup>7)</sup>あまりにも皮肉な仕打ちではないか。

“So, there’s definitely nothing. No deferral, nothing like that” (261) と、臓器提供の延期措置は存在しないことを確認するトミーに、エミリ先生は“**No, Tommy, There’s nothing like that. Your life must now run the course that’s been set for it**”と答える。「クローン」に向けられた冷酷非情な死の宣告である。トミーは病院へと帰る途中、キャシーを車に残して一人暗闇に身を隠すと、叫び、暴れ、怒りを爆発させる。猶予が与えられることがあるという話が噂に過ぎない可能性について二人はある程度予測をしていたが、エミリ先生の口から発せられた、人間性の全てを否定されるような言葉に対する備えはできていなかったはずである。それでも、キャシーと一緒に叫んだり暴れたりもしない。トミーに必死でしがみつき、彼が落ち着くのを待つと、二人は定められた運命の中に戻っていく。逃げ出すことも、恐怖や痛みから逃れるために自らを殺めることも、自分たちを利用する人々を傷つけることも、彼らの口から語られることはない。

## 6. おわりに

*Never Let Me Go*の冒頭のキャシーの自己紹介は「教えているようで教えてくれてはいなかった」ヘールシャムでの教育と、自分たちを恐れ、疑い、死んでいく道しか教えてくれなかった

“guardian” たちへの返答であるとの解釈を本稿では示した。自分たちのような存在を作り上げた人間の一人であるマダムから別れ際に “Poor creatures” “You poor creatures” (267) と繰り返し言われたキャシーが、職業人としての自分の存在意義を、自他共に認める優秀な “carer” であることを、更には「選ぶ」という自主的な行為が可能な自分を主張する場としての役割を果たしているともいえるだろう。

また本稿は、記憶を辿り始める直前にキャシーがヘールシャム出身である自分たちを “lucky” だったと言い放つことにも大きな意味があると考えた。ルースを失い、トミーを失い、自らも間もなく提供によって命を終えようとしている今、一人で死に向かわなければならない孤独と無念を隠すためにも、「かわいそうな子たち」などという言葉で自分たちの生きた日々を風に運び去らせてしまわれたいためにも、自らの人生を確認する言葉としてキャシーは “lucky” を選んだのではないだろうか。この言葉で穏やかに上塗りをしてしながら回想をすることで、育てられた理由を知らなかった自分を憐れむことなく、忘れたい苦しさや悔しさを伴ったエピソードさえ避けることなく、自らの追体験をしているといえるだろう。これは、辛く悲しい記憶しか持たなかったであろう一人の “donor” が死期を前にヘールシャムについて聞いたがり、キャシーの記憶を自らのものに重ねて安らぎを得ようとしたことと類似している。思い出を語るキャシーの言葉にどこか他人事のような冷静さが感じられるのも、彼女の置かれた状況と表現された感情とに噛み合わないような印象を与えられるのも、口にしたことを確認するような表現が度々用いられるのも、“lucky” である自分を彼女が強く意識したことに起因するとも考えられるのである。

隔離された寄宿学校と臓器提供者たちの共同住宅と臓器提供者のいる病院以外をほとんど知ることのなかったキャシーが、エミリ先生の語った医学の発展への期待や、偽善的で都合主義的な世論や権力についてどこまで理解できるかは不明である。しかし、エミリ先生の話が現実を恐ろしいまでに映しだしていることを知る真の読者である我々は、キャシーたちに定められた運命の残酷さ、それを受け入れることしかできなかった彼らの無力さや弱さや柔順さ、抑制のきいた声でしか語られない思いなどに共感して痛みを感じ、作品と現実の境を曖昧にされてしまう。

Anne Whitehead はこのような現象はイシグロの意図するところだとして次のように論じている。“The passive empathy invited by Ishiguro’s incorporation of an internal addressee enables us to take up Kathy’s perspective and to become inexorably drawn into her world, so that by the end of the novel we too have become ‘carers’ through our involvement in and affective engagements with her story” (75). 彼女は“carers”に語りかけるキャシーのナレーションによって得られる視点によって、真の読者は作品世界との感情的な関わりを結ぶことが可能になると説明したうえで、「最終的には我々も ‘carers’ になっている」と表現する。つまり、キャシーが想定する作品中の読者と真の読者との境がなくなることを意味しているといえるのである。Whitehead は更に、“... he [Ishiguro] pushes the reader not to replicate Kathy’s limitations

of perspective and understanding. He challenges us to become (as Kathy does not, and as Tommy does only briefly and intermittently) “agitated,” stirred to anger by the inequities that define and circumscribe the lives of the clones” (76) と述べて、広い視野と深い理解を持つことが可能な真の読者が、キャシーたちの命の境界を定め、制限する不公平に対して感情的に向き合うことをイシグロは強く望んでいると論じている。

当のイシグロは “I want my books to be entertaining, of course, with no overly hard work on a page-to-page basis, but I’m also trying to have a serious conversation with my readers. I hope we are talking about the serious things in life, about what makes our life worthwhile” (Matthews 116) と語り、現実を生きる読者が作品世界との真面目な繋がりを読後も手離すことなく生きていくことを当然のように考えていることを匂わせている。*Never Let Me Go* には、真の読者であり、キャシーやルースやトミーの苦悩やささやかな喜びに向き合って ‘carer’ となった我々が、現実世界の問題に目を向ける時、弱者が沈黙させられ、その存在意義が利用価値で計られるような社会に立ち向かう必要性を意識せざるを得ない「からくり」が仕掛けられていると思えてならない。

#### 注

- 1 2005年Faber and Faber発行の*Never Let Me Go*ではChapter Oneの本文は3ページより始まるため、本論が「自己紹介」と位置づける6ページの2行目まではおおそ3ページである。
- 2 2005年に出版された山内の論文には、同年発表の*Never Let Me Go*への言及はない。
- 3 イシグロの小説の多くは冒頭の字下げがない。Faber & Faber から出版された*When We Were Orphans*は2000年の初版では字下げが無かったが、2013年版にはある。
- 4 Hailshamという学校名についての説明は作品中には無いが、“hail”は「歓迎する」「熱烈に是認する」といった意味、“sham”には「まがいの」「ペテン師」といった意味がある。(ランダムハウス英和大辞典 第2版 1993) 著者の思わくが垣間見える表現である。英国ランカシャーにあるHeysham原子力発電所との類似を指摘する声もある。
- 5 イシグロは柴田元幸のインタビューで「『わたしを離さないで』でも、これまでの作品でずっと使ってきた、「信用できない語り手」を使うのはよそう、と決めたんです」「やっぱり何かしら読者から隠していることもある。でもそのことが中心ではないですね。基本的にはきわめてストレートな語り手です」(43)と述べている。(『僕らは一九五四年に生まれた』『Coyote』2008)
- 6 Konrad Zacharias Lorenz (1903 – 1989) が提唱した学習の一形態。刻印づけ。
- 7 キャシーたちが “guardians” から直接聞いたとの記述はない。しかし、“The guardians always insisted these stories were nonsense. But then the older students would tell us that was exactly what the guardians had told them when they were younger, and that we’d be told the ghastly truth soon enough, just as they were” (50) との説明は、外に出た生徒たちの無残な最期とやがて語られるキャシーたちの残酷な運命との関連を示唆するものと解釈できるであろう。
- 8 キャシーはロジャー・C (Roger C.) との会話を回想する中でも、“students” とはヘルシャムで育ち、

今は国中に散って“donor”や“carer”になっている自分たちのことを指していたと語っている。  
(207-8)

#### 参考文献

- カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』土屋政雄 訳 早川書房 2008年。  
—『特急二十世紀の夜と、いくつかの小さなブレイクスルー』土屋政雄 訳 早川書房 2018年。  
柴田元幸「僕らは一九五四年に生まれた」『Coyote』No.26 Switch 2008年 40-44。  
中川僚子「廃物を見つめるカズオ・イシグロ」『水声通信No.26』水声社 2008年 86-97。  
平井杏子『カズオ・イシグロ：境界のない世界』水声社 2017年。  
藤田由季美「カズオ・イシグロの声をめぐって」『水声通信No.26』水声社 2008年 116-123。  
森川慎也「クローンはなぜ逃げないのか —同時代の人間認識とカズオ・イシグロの人間観」『カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』を読む』田尻芳樹・三村尚央 編 水声社 2018年 241-255。  
山内啓子「カズオ・イシグロの文体—余韻と情感を生み出すイシグロ作品の特徴—」『テキストの地平』富山太佳夫、加藤文彦、石川慎一郎 編 英宝社 2005年 497-510。  
“Carer.” Def. b. *The Oxford English Dictionary*. 2<sup>nd</sup> ed. Oxford: Clarendon, 1989. Print.  
Currie, Mark. “Controlling Time: *Never Let Me Go*.” *Kazuo Ishiguro*. Ed. Sean Matthews and Sebastian Groes. London: Continuum, 2009. 91-103. Print.  
“Donor.” Def. 1, 3. *COBUILD advanced English Dictionary*. HarperCollins. Web. 7 Nov. 2019.  
Ishiguro, Kazuo. *Never Let Me Go*. London: Faber and Faber, 2005. Print.  
Matthews, Sean. “‘I’m Sorry I Can’t Say More’: An Interview with Kazuo Ishiguro” *Kazuo Ishiguro*. Ed. Sean Matthews and Sebastian Groes. London: Continuum, 2009. 114-25. Print.  
Mullan, John. “On First Reading *Never Let Me Go*.” *Kazuo Ishiguro*. Ed. Sean Matthews and Sebastian Groes. London: Continuum, 2009. 104-113. Print.  
Sim, Wai-chew. *Kazuo Ishiguro*. New York: Routledge, 2010. Print.  
Whitehead, Anne. “Writing with Care: Kazuo Ishiguro’s *Never Let Me Go*” *Contemporary Literature*, Vol. 552, No. 1. Madison: U of Wisconsin P, 2011. 54-83. Print.